

率の改善によるものであるかがわかる。また、0～4歳までの死亡率改善で、男子50%と半分、女子42%も寄与している。その他では、20歳台の青年期の死亡率改善が大きく寄与している。

これが昭和40年～50年になると、この間に平均寿命は、男子3.99年、女子3.97年伸びたのであるが、乳児死亡率の改善が相変わらず大きく寄与しており、男子17%、女子14%の寄与率である。しかし、昭和30年～40年に比べると小さくなっており、約半分の影響しか与えていないことになる。そして男子の60歳台、女子の70歳台が1割以上寄与したのを中心に、高年齢死亡率の改善が平均寿命の伸びに、大きな役割を果たしていることになる。

表4 年齢別特殊死亡率の諸外国との比較

年 齢	男 子			女 子		
	日 本		外 国 1975～6年	日 本		外 国 1975～6年
	1978年	1976年		1978年	1976年	
0	9.4	10.3	8.9 スウェーデン	7.4	8.1	7.3 スウェーデン
1～4	0.8	0.9	0.4 "	0.6	0.7	0.4 スウェーデン等
5～9	0.4	0.4	0.3 スウェーデン等	0.2	0.3	0.2 デンマーク等
10～14	0.2	0.3	0.3 "	0.2	0.2	0.2 "
15～19	0.8	0.8	0.8 "	0.3	0.3	0.3 イギリス
20～24	0.9	1.0	1.0 オランダ等	0.4	0.5	0.4 イギリス等
25～29	0.9	1.0	0.8 オランダ	0.6	0.6	0.4 オランダ
30～34	1.1	1.3	0.8 "	0.7	0.8	0.6 オランダ等
35～39	1.6	1.8	1.4 "	1.0	1.0	0.9 "
40～44	2.8	3.1	2.2 ギリシア	1.4	1.6	1.2 スイス
45～49	4.4	4.6	3.6 "	2.2	2.4	2.2 ギリシア
50～54	6.2	6.3	5.9 "	3.4	3.7	3.3 "
55～59	9.6	10.4	10.7 "	5.1	5.7	5.4 ギリシア等
60～64	15.5	16.8	16.5 "	8.3	9.0	8.5 スイス
65～69	26.3	28.3	27.2 "	14.3	15.6	14.8 スウェーデン
70～74	45.1	50.1	42.6 "	26.7	29.7	26.0 スイス
75～79	76.3	80.6	70.8 "	49.7	54.6	45.5 カナダ
80～84	121.6	133.0	106.9 "	90.3	98.9	77.1 "
85～	208.0	225.3	198.2 "	177.4	194.9	149.1 "

最新の諸外国の死亡統計は1976年のものであり、年齢別死亡率の最も低い国を各々の年齢ごとに選り、わが国の年齢別死亡率と比較してみると（表4参照）、その後、諸外国でも死亡率の低下はあると思うが、1978年のわが国の年齢別死亡率では、男子10～14歳、20～24歳、55～69歳、女子55～69歳で、諸外国の死亡率を下回っており、また、男子15～24歳、女子10～14歳は、ほぼ同程度の死亡率となっている。5～24歳の若年齢および55～69歳の高年齢では、世界のトップレベルであるといえる。

（金子武治・白石紀子）

2 死因別にみた死亡

(1) はじめに

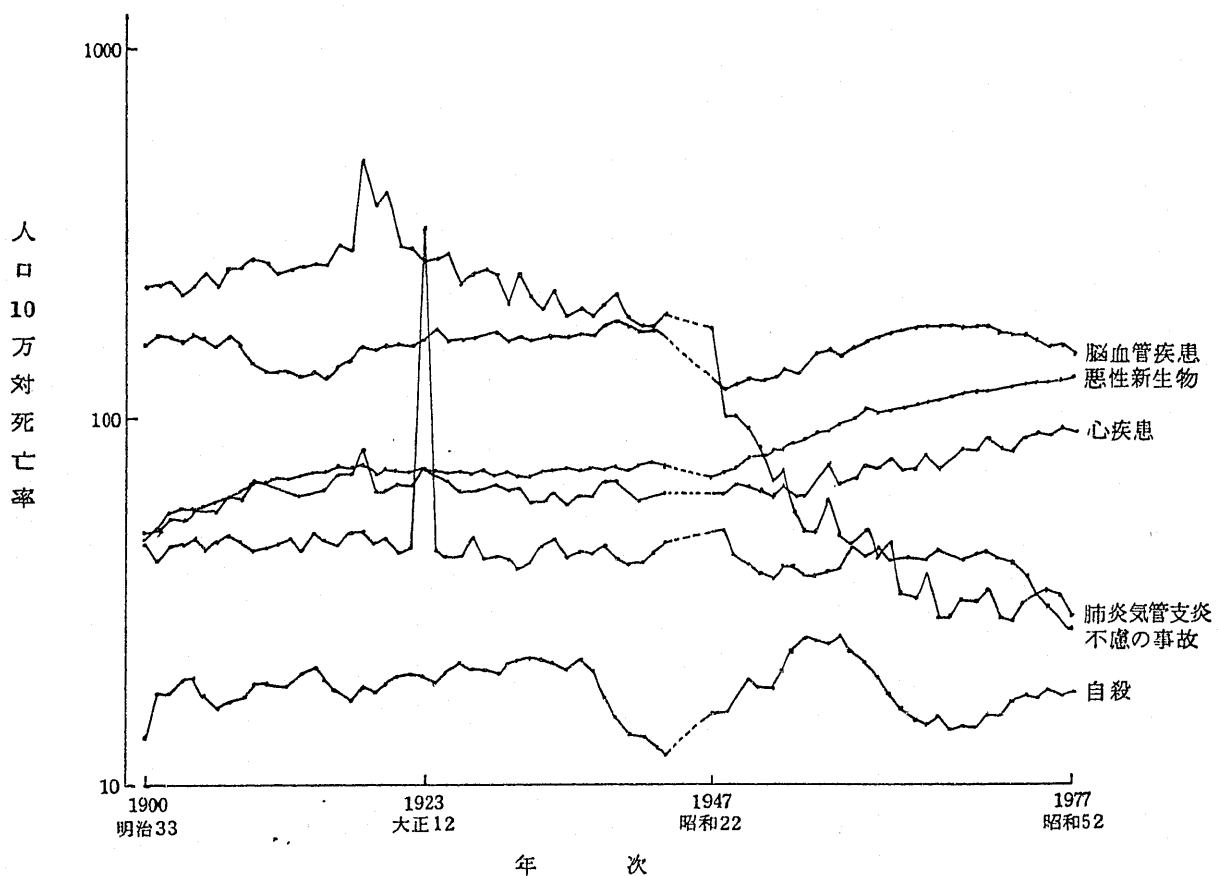
死因別死亡の年次推移をみる際に、どのような死因分類を取扱うかが問題になる。分類の方法とし

ては、17項目の大分類、あるいは全死因別死亡をA、B、C、D、Eの5群に大別する方法、または死因順位第1位から第10位までの10大死因を取扱う方法がある。篠崎（1967）は明治32年から5年ごとに昭和39年までに渡り、17項目の死因別死亡の年次推移を、明治32年の総死亡数を100とした割合で分析をしている。一方、昭和52年度の人口動態統計によると、10大死因による死亡が総死亡数の83.2%を占めている。したがって、本報告では、昭和52年度の10大死因を基準にして、これらの疾病の死亡率を人口10万当り、あるいは乳児死亡の場合には出生10万当りの数を用い、分析可能な限り、明治33年までさかのぼり分析を行った。

（2）死因別死亡の推移

明治33年から昭和52年までの期間に渡り、主要死因別に人口10万対の死亡率の推移をみたい(図2)。

図2 主要死因別死亡率の年次推移



i 脳血管疾患

脳血管疾患の死亡率は明治33年に人口10万対159.2（総死亡の7.7%，死因順位第3位）から明治42年～大正5年の人口10万対130～140のやや低率の時期を除いては、第2次大戦前までは160～170で経過し、第2次大戦後の昭和23年には人口10万対117.9にまで低下し、その後は上昇を続け、昭和45年には175.8に達し、その後は下降傾向を示し、昭和52年には149.8（総死亡の24.6%，死因順位第1位）まで下がっている。

ii 悪性新生物

悪性新生物の死亡率は明治33年に人口10万対46.4（総死亡の2.2%）から明治42年には67.5と上昇し、その後は昭和24年まで人口10万対70前後の値で横ばい傾向を示したが、その後上昇を続け、昭和

35年には100を突破し、その後もさらに上昇を続け、昭和52年には128.4（総死亡の21.1%、死因第2位）となり、明治33年以来、77年間に2.8倍にも増加した。悪性新生物による死亡率が「脳血管疾患」による死亡率を上まわるのも、この1両年のうちと思われる。悪性新生物の個々のガンについて、年齢階級別死亡率の年次推移は平山（1977）が詳細に分析を行っている。

iii 心疾患

心疾患による死亡率は、明治33年に人口10万対48.1（総死亡の2.3%）から昭和34年までは僅かに上昇し60台に止まっていたが、昭和35年以後は急速に上昇し、昭和52年には91.2（総死亡の15.0%、死因順位第3位）まで増加している。

iv 肺炎および気管支炎

肺炎・気管支炎による死亡率は、明治33年に人口10万対226.1（総死亡の10.9%、死因順位第1位）から僅かに上昇し、大正7年～9年のスペイン風邪流行時には400～500と増加するが、その後は減少し、第2次大戦後の減少は著しい。昭和52年には人口10万対28.6（総死亡の4.7%、死因順位第4位）まで下がっている。

v 不慮の事故

不慮の事故の死亡率は明治33年に人口10万対45.3（総死亡の2.2%）から、大正12年の関東大震災時の死亡率人口10万対122.7を除けば、昭和48年まで40台を上下し、横ばい傾向を示しているが、その後減少しはじめ、昭和52年には人口10万対26.7（総死亡の4.4%、死因順位第5位）まで下がっている。昭和52年度における不慮の事故死の内訳は、昭和52年度の人口動態社会経済面調査報告を参照されたい。

vi 自殺

自殺による死亡率は明治33年に人口10万対13.4（総死亡の0.6%）から、昭和12年の20.2まで横ばい傾向を示しているが、その後減少し、昭和18年には12.1と最小値を示し、その後しだいに上昇し、昭和33年の25.7を頂点として再び減少をはじめ、昭和42年に14.2まで減少し、その後は僅かに上昇し、昭和52年には人口10万対17.9（総死亡の2.9%、死因順位第7位）まで増加している。

vii 高血圧性疾患

高血圧性疾患の死亡率は昭和25年に人口10万対12.0（総死亡の1.1%）から昭和40年に19.3まで上昇し、その後は僅かながら減少し、昭和52年には人口10万対17.0（総死亡の2.8%、死因順位第8位）になった。

viii 肝硬変

肝硬変の死亡率は明治33年に人口10万対3.8（総死亡の0.2%）から明治40年には6.0へと増加するが、その後、昭和28年までは6～8で経過し、その後、徐々に上昇し、昭和52年には人口10万対13.6（総死亡の2.8%、死因順位第9位）まで増加した。

ix 糖尿病

糖尿病の死亡率は明治9年に人口10万対2.1（総死亡の0.1%）から徐々に上昇し、昭和17年に人口10万対3.5まで増加するが、第2次大戦後の昭和22年には2.3と減少する。その後、昭和35年まで徐々に死亡率は上昇するが、その後の増加率は急速であり、昭和52年には人口10万対8.4（総死亡の1.4%、死因順位第10位）にまで上昇している。本疾病の詳細な分析結果については、今泉・三田（1978）を参照されたい。

x 男女別死因別死亡

男女別死因別死亡の年次推移は、ほぼ総死亡の死因別動向と同じ傾向にあるが、男女によって差異

表 5 年齢階級別、主要死因別死亡率の年次推移

年次	乳 児 死 亡 ¹⁾				1 ~ 4 歳 ²⁾				
	心疾患	肺 炎・ 気管支炎	先天異常	不慮の事故	心疾患	肺 炎・ 気管支炎	先天異常	悪 性 新 生 物	他 殺
明治33	—	—	—	—	—	—	—	—	—
38	—	—	—	—	—	—	—	—	—
43	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	72.7	3852.0	66.6	111.5	14.2	847.2	—	1.2	—
10	93.2	3956.7	73.9	125.3	13.6	692.4	—	1.1	—
11	90.1	3701.4	71.3	120.0	14.2	644.5	—	1.1	—
12	85.6	3677.0	120.6	109.6	15.0	590.4	—	1.0	—
13	69.0	3613.0	155.7	122.7	15.0	604.3	—	1.1	—
14	64.8	3265.3	160.1	107.1	15.0	670.1	—	1.0	—
昭和元年	58.0	2989.0	170.7	111.3	14.0	495.8	—	1.2	—
2	54.4	3244.5	153.4	118.7	13.4	556.1	—	1.2	—
3	60.3	3264.0	158.3	105.6	13.8	568.4	—	1.2	—
4	59.5	3156.5	157.6	107.6	13.6	549.2	—	1.0	—
5	62.4	2617.2	144.2	99.6	13.3	406.9	—	1.2	—
6	59.5	2907.4	141.2	100.6	12.8	512.0	—	1.1	—
7	51.5	2598.3	138.2	99.8	12.3	458.1	—	1.4	—
8	32.7	2553.7	177.7	71.2	10.1	399.7	7.5	3.5	1.0
9	33.4	2784.4	174.0	71.2	9.8	474.0	7.6	3.1	0.9
10	25.8	2247.5	160.6	59.5	9.0	413.2	7.2	3.4	0.9
11	26.7	2436.6	171.9	61.9	9.0	391.1	6.9	3.2	0.9
12	26.6	2445.5	171.9	62.1	9.5	422.6	6.9	3.2	0.9
13	29.9	2600.1	161.5	63.4	9.9	399.8	6.6	4.0	0.7
14	28.8	2675.4	168.0	58.1	9.4	498.2	6.7	3.3	0.6
15	28.6	2140.4	141.6	59.9	8.9	355.4	5.6	3.9	0.5
22	36.5	1873.9	146.7	68.9	10.7	335.2	6.8	3.5	1.9
23	29.2	1225.8	170.0	81.9	8.3	158.1	7.1	1.9	2.2
24	16.3	1443.1	197.0	76.6	8.7	182.1	8.2	2.4	2.9
25	5.9	1332.8	237.0	93.6	6.0	144.1	7.4	5.1	3.3
26	6.5	1322.5	227.1	96.6	6.1	124.7	5.4	5.1	2.8
27	3.7	1128.9	210.4	103.9	5.5	92.4	5.2	5.5	2.9
28	5.2	1154.7	210.8	99.3	5.4	88.1	5.2	5.4	3.1
29	7.7	1081.0	195.9	96.8	4.5	75.2	5.7	5.8	3.1
30	6.7	943.3	205.9	100.5	3.9	61.1	6.4	6.4	3.4
31	9.2	1014.5	198.2	97.8	3.4	58.1	6.9	6.8	3.1
32	12.1	1065.0	189.0	89.4	3.2	62.0	6.5	6.4	2.9
33	13.3	934.7	194.6	83.3	2.5	46.3	6.4	7.0	3.2
34	16.1	931.9	197.6	89.7	2.4	43.0	6.6	6.7	2.9
35	16.4	856.8	190.3	81.9	2.5	39.3	7.3	7.9	3.1
36	16.4	773.5	195.0	81.8	2.3	31.8	7.5	7.3	2.8
37	15.9	680.0	209.1	76.2	2.0	28.8	7.4	7.7	2.6
38	17.6	547.4	200.0	70.1	1.7	21.8	7.6	7.9	2.4
39	15.9	435.6	196.2	67.2	1.8	18.9	7.6	8.1	2.4
40	17.3	364.8	197.9	62.0	1.6	18.2	8.2	8.2	2.6
41	16.8	343.1	226.5	74.4	1.2	14.7	8.3	8.1	2.2
42	16.6	237.2	192.0	59.9	1.3	14.3	8.2	8.3	2.6
43	26.9	235.5	209.8	61.7	1.1	12.6	9.8	7.8	2.8
44	18.4	209.0	210.2	60.5	1.1	12.9	10.5	6.9	2.1
45	17.0	170.4	202.4	59.0	1.2	11.5	11.5	7.8	2.3
46	18.6	141.4	214.1	52.5	1.4	9.7	10.5	7.0	2.5
47	17.8	125.7	213.1	53.4	1.3	9.2	11.1	7.8	2.5
48	16.8	119.3	215.4	51.6	1.4	9.3	12.3	7.2	2.3
49	17.7	106.8	219.8	53.4	1.6	9.3	11.6	6.6	2.6
50	18.6	90.4	214.2	48.3	1.5	8.2	10.9	7.3	2.7
51	16.4	73.4	212.3	47.0	1.6	6.7	11.1	6.7	2.7
52	15.4	61.8	219.0	43.0	1.5	5.1	10.7	6.6	2.3

1) 出生10万対

2) 人口10万対

不慮の 事故	65 ~ 69 歳 ²⁾									
	全結核	悪性新生物	糖尿病	心疾患	脳血管疾患	高血圧症	肺炎・ 気管支炎	肝硬変	自殺	不慮の 事故
—	—	—	—	—	—	—	496.6	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	383.6	—	—	—
—	169.3	389.6	8.4	262.9	887.2	—	437.8	29.2	47.9	51.7
—	171.1	474.7	12.9	258.5	979.7	—	446.0	34.0	58.7	51.7
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
85.9	118.9	528.7	24.3	330.8	1381.2	—	365.7	44.6	62.2	62.6
80.4	117.0	523.0	26.4	363.6	1448.7	—	454.5	45.0	56.1	68.2
82.6	114.5	518.5	24.0	343.5	1421.0	—	365.2	41.1	57.2	58.3
80.7	118.4	526.6	25.3	364.5	1455.5	—	434.5	38.3	59.5	60.0
89.4	106.8	516.4	24.9	347.6	1380.3	—	333.3	42.6	56.7	54.9
81.0	104.7	517.5	26.4	394.6	1400.4	—	408.8	42.4	47.8	62.3
75.4	109.6	508.0	24.7	392.3	1487.4	—	453.4	39.8	47.7	54.4
74.0	114.6	508.4	24.2	380.8	1431.6	—	425.5	42.1	44.0	59.5
99.9	129.8	488.1	14.6	380.5	1122.9	—	482.7	40.7	64.1	74.1
103.4	127.7	513.1	12.4	376.1	1043.8	—	267.3	43.7	64.6	72.9
91.0	142.3	542.3	15.2	413.1	1069.4	—	227.0	50.5	65.9	60.0
83.4	170.5	579.6	16.7	438.9	1086.5	87.9	253.2	48.4	67.8	50.3
77.0	171.0	588.5	17.5	431.9	1068.8	76.3	234.6	46.4	56.0	51.8
76.6	160.2	607.9	17.7	409.6	1094.6	77.8	192.6	49.1	53.6	48.9
74.2	154.3	603.2	18.1	430.7	1084.1	72.0	216.1	50.5	50.4	60.9
76.7	155.7	621.1	16.5	389.5	1055.7	69.0	140.1	55.7	52.7	56.3
76.1	146.6	626.6	18.9	378.4	1057.0	67.3	130.1	56.0	53.2	55.4
71.4	146.8	644.3	22.5	404.8	1149.8	73.1	121.0	59.0	56.7	56.8
73.4	156.7	636.0	22.4	449.4	1152.1	76.7	181.3	56.5	51.7	63.7
74.9	139.0	656.2	22.3	369.0	1080.2	84.0	126.5	59.1	57.4	65.1
80.9	135.0	662.7	23.3	375.2	1092.2	87.5	114.0	56.3	53.7	78.3
69.1	135.8	667.7	27.5	391.6	1104.6	95.1	141.0	54.4	51.1	73.2
68.6	118.6	666.3	27.0	368.3	1110.2	91.8	101.8	54.1	48.9	73.3
61.3	127.7	664.1	31.5	384.6	1107.8	101.4	126.0	53.5	44.4	71.3
59.5	104.1	668.2	29.5	347.7	1097.2	96.8	86.3	56.2	40.9	74.1
56.7	104.0	672.3	33.8	336.2	1056.0	95.3	93.1	51.2	41.4	74.1
54.4	103.9	677.2	36.9	371.7	1059.0	93.9	111.8	50.0	42.5	77.9
54.4	95.8	681.2	43.2	335.2	1009.0	87.0	79.0	50.0	40.4	84.7
49.8	84.2	676.8	42.0	348.2	964.1	80.7	83.4	50.8	39.8	81.5
47.2	79.5	678.1	43.4	351.8	928.2	75.7	88.5	53.3	41.0	80.9
45.9	77.2	679.8	46.3	359.0	919.6	66.3	97.4	55.1	38.2	85.9
45.7	80.9	679.4	50.1	374.7	901.2	71.7	117.8	56.6	40.5	87.1
42.3	64.8	670.8	46.7	342.9	835.2	63.4	88.9	56.1	39.9	87.3
44.3	55.8	670.4	46.1	318.7	767.3	53.7	81.6	54.8	41.6	77.1
41.4	53.2	652.1	46.4	333.7	720.4	53.2	85.6	54.0	44.2	74.1
36.1	48.9	645.8	47.6	326.4	675.9	51.1	90.3	54.9	36.5	66.4
34.5	42.6	627.5	46.5	305.4	602.3	46.9	91.1	54.7	36.9	59.8
30.7	38.6	618.6	43.3	303.7	570.5	41.8	81.6	51.4	35.7	55.0
30.5	35.7	616.9	40.9	297.5	533.5	40.4	69.0	50.3	37.8	52.9

がみられる疾病は「不慮の事故」と「肝硬変」で、これらの疾病は総死亡の3/4近くを男子が占めている。前者は男女間の格差が縮まる方向へ、後者は格差が広がる方向へと向かっている。「自殺」による死亡は、男女格差が広がる傾向がみられ、昭和52年における男子の占める割合は6割である。一方、女子に多い疾病は「老衰」で、総死亡中占める女子の割合は6～7割である。「高血圧症」は、やや女子の占める割合が高く、男女格差が広がる傾向をみせており、昭和52年における女子の占める割合は6割弱である。

(3) 年齢階級別死因

i 乳児死亡

昭和52年度人口動態統計によれば、乳児死亡での死因順位第1位は「先天異常」で、総乳児死亡の25%を占めている。第2位は「出生時損傷、難産およびその他の無酸素症、低酸素症」で、総乳児死亡の19%を占めている。第3位の「肺炎・気管支炎」による死亡は、上位2疾病に比べて総乳児死亡の占める割合は低く7%である。

表5は、先天異常、肺炎・気管支炎、不慮の事故、心疾患による乳児死亡率の年次推移を示している。「先天異常」による死亡は、第2次大戦後の昭和22年に死因順位第6位（出生10万対146.7の死亡率）であったが、昭和29年～35年に第4位、昭和36年～43年に第3位となり、昭和44年以降は乳児死因の第1位を占めるに至った。昭和52年の死亡率は出生10万対219.0で、戦前より戦後の方が僅かながら死亡率の上昇を示している。「先天異常」に関する詳細な分析は今泉（1973）を参照されたい。次に、「肺炎・気管支炎」による死亡率は大正14年に出生10万対3265.3から減少し続け、昭和15年には2140.4へと低下した。第2次大戦後の昭和25年には出生10万対1332.8から、昭和45年には170.4、昭和52年には61.8にまで激減し、昭和44年には「先天異常」による死亡に抜かれ、死因順位第2位に、翌年の昭和45年以降は第3位の座を占めるに至った。次に「不慮の事故」による死亡率は大正14年に出生10万対107.1から減少し続けたが、戦後再び上昇し、昭和27年には昭和初期の水準に戻るが、その後は減少し続けている。昭和52年の死亡率は出生10万対43.0で、総乳児死亡の5%を占め、死因順位第7位である。最後に「心疾患」による死亡率は大正14年に出生10万対64.8から減少し続けたが、戦後の減少はめざましく、昭和27年には最低の死亡率を示したが、その後、昭和34年まで上昇を続け、それ以降は横ばい傾向を示している。昭和52年の死亡率は出生10万対15.4で、総乳児死亡の2%を占め、死因順位第9位である。

ii 幼児期の死亡

昭和52年度人口動態統計によれば、1～4歳での死因順位第1位は「不慮の事故」で総死亡の42%を占めており、第2位の「先天異常」は15%、第3位の「悪性新生物」は9%、第4位の「肺炎・気管支炎」は7%を占めている。これらの死因第1位から第4位までで総死亡の7割強を占めることがわかる。

表5は、これら4疾病のほかに他殺と心疾患の死亡率の年次推移を示している。まず「不慮の事故」による死亡率は昭和8年に人口10万対85.9から減少し、特に昭和35年以降の減少が著しい。昭和52年の死亡率は人口10万対30.5にまで減少した。次に、「先天異常」による死亡率は昭和8年に人口10万対7.5から、戦後の昭和27～28年に最小値5.2を示し、その後、僅かながら上昇を続け、昭和52年の死亡率は人口10万対10.7を示している。次に、「悪性新生物」による死亡率は大正14年に人口10万対1.0から上昇し、戦後の昭和23年に低い死亡率を示すが、その後、昭和42年まで上昇を続け、それ以降は減少傾向にあり、昭和52年の死亡率は人口10万対6.6を示している。次に、「肺炎・気管支

炎」による死亡率は大正14年に人口10万対670.1から減少し、昭和29年には75.2まで減少し「不慮の事故」による死亡に抜かれ、さらに昭和46年には「先天異常」による死亡に抜かれ、昭和52年の死亡率は人口10万対5.1を示している。次に、「他殺」による死亡率は、戦前には人口10万対1前後であったが、戦後の死亡率は上昇し、3前後の値を示している。昭和52年の死亡率は人口10万対2.3で、総死亡の3%を占め、死因順位第5位である。最後に「心疾患」による死亡率は大正14年に人口10万対15.0から減少傾向を示している。昭和25年には人口10万対6.0にまで減少し、昭和28年以降は「先天異常」による死亡に抜かれ、昭和52年の死亡率は人口10万対1.5を示している。

iii 学童・青年・壮・中年期死亡

昭和52年度人口動態統計によれば、学童期、青年期を通じ5～24歳までは「不慮の事故」が、25～29歳では「自殺」が死因第1位を占めている。第2位は5～14歳で「悪性新生物」、15～24歳で「自殺」、25～29歳では「不慮の事故」である。30～64歳では「悪性新生物」が死因第1位、第2位は30～39歳で「自殺」、40～64歳で「脳血管疾患」となる。第3位は30～39歳で「不慮の事故」、40歳以上で「心疾患」となる。

iv 老年期の死亡

老年人口のうち、特に65～69歳での死亡率についてふれたい。昭和52年度における死因順位第1位から第5位までの死因は、総年齢での死因順位、第1位と第2位を入れ変えれば全く同じである。表5は10大死因別死亡率の年次推移を示している。「悪性新生物」の死亡率は、戦前には横ばいであったが、戦後の昭和22年に人口10万対488.1から徐々に上昇し、昭和41年には最大値681.2を示し、その後、僅かに減少傾向を示している。次に、「脳血管疾患」の死亡率は年次と共に減少している。「心疾患」の死亡率は長期間に渡り、ほぼ横ばい傾向を示している。「肺炎・気管支炎」による死亡率は、他の年齢階級での死亡率と同じく、年次と共に減少している。次に「不慮の事故」の死亡率は、昭和8年に人口10万対62.6から昭和33年までほぼ横ばい傾向を示しているが、その後、僅かに上昇し、昭和41年に最大値87.3を示し、その後は減少し、昭和52年には最小値に近い値にまで減少している。次に、「肝硬変」の死亡率は、昭和8年に人口10万対44.6から昭和22年に40.7の低い死亡率を示し、その後、徐々に上昇し、昭和33年には最大値59.1を示したが、その後、やや減少傾向を示している。次に、「糖尿病」の死亡率は食糧不足の著しかった昭和23年に最小値を示したが、その後、徐々に上昇し、昭和45年の死亡率は人口10万対50.1を示したが、その後、僅かながら減少傾向を示している。次に、「高血圧症」の死亡率は、昭和37年に最高値を示し(人口10万対101.4)、その後、急激な減少を示し、昭和52年には人口10万対40.4に至っている。次に、「自殺」の死亡率は、昭和25年に人口10万対67.8と最大値を示したが、その後、減少傾向を示し、昭和52年には37.8にまで低下した。最後に「全結核」の死亡率は、昭和26年に人口10万対171.0と最大値を示したが、その後減少し、昭和52年には人口10万対35.7にまで低下した。

(4) 死因別平均死亡年齢

年次別に、各疾病の平均死亡年齢をみると(表6)、「肺炎・気管支炎」による平均死亡年齢は過去10年間に11.2歳伸びた。この平均死亡年齢上昇は、4歳未満死亡の占める割合が過去10年間に11.7%も減少したことによる。次に、「不慮の事故」、「高血圧症」、「糖尿病」、「心疾患」、「脳血管疾患」、「悪性新生物」の順に平均死亡年齢は上昇している。一方、「肝硬変」と「自殺」による平均死亡年齢は過去10年間にわたり変化がみられない。但し、女子の「肝硬変」による平均死亡年齢は過去10年間に2.3歳、同じく「自殺」による平均死亡年齢は2.6歳上昇した。「肝硬変」による死亡は男子が

表 6 10大疾病で死亡した者の年次・男女別平均死亡年齢

年次	悪性新生物	糖尿病	心疾患	脳血管疾患	高血圧症	肺炎・ 気管支炎	肝硬変	老 衰	不慮の事故	自 殺
総 数										
昭 43	61.7	64.7	69.0	70.5	73.5	60.6	60.3	83.3	39.7	46.5
44	60.0	65.1	69.5	70.7	73.5	60.9	60.1	83.5	40.1	46.8
45	62.1	65.2	69.8	71.0	73.9	63.3	60.4	83.6	40.5	46.8
46	62.4	65.8	69.8	71.2	74.4	64.0	60.2	83.8	40.8	46.4
47	62.6	66.2	70.2	71.5	74.9	65.1	60.0	84.0	40.8	46.8
48	62.9	66.4	70.8	71.9	75.6	66.6	59.9	84.2	41.5	47.0
49	63.2	67.1	71.2	72.1	76.0	67.7	60.0	84.4	42.3	46.9
50	63.3	67.2	71.5	72.4	76.4	69.3	60.2	84.5	42.7	46.9
51	63.6	67.4	72.0	72.6	76.7	71.1	60.1	84.6	43.5	47.1
52	63.9	68.2	72.1	72.8	77.1	71.8	60.5	84.7	43.7	47.3
男 子										
昭 43	62.4	64.8	67.3	68.8	71.7	58.8	58.7	82.1	38.2	44.9
44	62.7	64.9	67.6	69.1	71.5	59.5	58.7	82.3	38.2	45.3
45	62.7	65.1	67.8	69.3	71.8	62.3	58.8	82.3	38.7	45.6
46	63.0	65.3	67.7	69.5	72.4	62.7	58.3	82.5	38.9	44.7
47	63.2	65.8	68.0	69.7	72.9	64.0	58.3	82.7	38.9	44.8
48	63.6	65.6	68.5	70.0	73.5	65.3	57.9	82.8	39.5	44.9
49	63.8	66.4	68.8	70.3	73.9	66.7	58.1	83.1	40.3	44.6
50	63.8	66.2	69.0	70.5	74.3	69.2	58.1	83.2	40.3	44.5
51	64.0	66.2	69.4	70.7	74.5	70.2	58.2	83.2	41.2	44.4
52	64.3	66.9	69.5	70.8	75.0	70.6	58.5	83.5	41.5	44.8
女 子										
昭 43	60.9	64.7	70.9	72.4	75.1	62.7	63.5	83.9	44.5	48.6
44	61.2	65.2	71.5	72.5	75.2	62.5	63.1	84.1	45.8	48.6
45	61.3	65.3	71.9	72.9	75.6	64.5	63.9	84.3	46.0	48.3
46	61.6	66.3	72.1	73.1	76.0	65.5	64.4	84.5	46.4	48.7
47	61.8	66.6	72.6	73.4	76.6	66.4	64.2	84.7	46.6	49.3
48	62.2	67.1	73.2	74.0	77.3	68.1	64.6	85.0	47.6	49.9
49	62.5	67.8	73.8	74.1	77.6	68.9	64.7	85.1	48.2	49.9
50	62.6	68.0	74.1	74.4	78.1	70.5	65.4	85.2	49.2	50.2
51	63.0	68.5	74.6	74.6	78.4	72.2	65.1	85.3	49.9	51.0
52	63.5	69.3	74.8	74.9	78.7	73.2	65.8	85.3	49.6	51.2

全体の7割を占めているが、年次的にみると、この率は増加傾向にある。

女子の平均死亡年齢が男子より高い疾病は、差の大きい順に「不慮の事故」、「肝硬変」、「心疾患」で、年次と共に年齢差が大きくなってきている。次に、「脳血管疾患」、「高血圧症」が続く。一方、「悪性新生物」による平均死亡年齢は男子の方が女子より高い。しかし、年次と共に差は縮まりつつある。

人口問題研究所の推定³⁾によれば、昭和43年から昭和52年の間に男女の平均寿命の伸びはそれぞれ3.5歳と3.6歳である。一方、この間の伸びより10大疾病の伸びの方が大きかった疾病は、男子では「肺炎・気管支炎」の11.8歳であるが、女子では「糖尿病」4.6歳、「心疾患」3.9歳、「肺炎・気管支

3) 人口問題研究所、『研究資料』, 第218号, 1978年12月, 23ページ。

炎」10.5歳、「不慮の事故」5.1歳である。

(5) 死因別死亡率の国際比較

表7は1970年代の22カ国における各種疾病の人口10万対死亡率を示している。日本人の方が諸外国人に比べて高い死亡率を示す疾病は「脳血管疾患」と「自殺」であり、一方、低い死亡率を示す疾病は「悪性新生物」、「心疾患」、「糖尿病」、「先天異常」、「不慮の事故」である。これら以外の疾病による死亡率は、諸外国と同程度である。

表7 諸外国の死因別死亡率

(人口10万対)

国名	年次	全結核	悪性新生物	糖尿病	心疾患	脳血管疾患	高血圧	血症	肝硬変	先天異常	不慮の事故	自殺
日本	1976	8.5	125.3	8.2	92.2	154.5	17.6	13.8	5.1	28.0	17.6	
カナダ	1973	1.8	149.5	14.8	251.0	73.3	7.4	11.3	7.7	59.5	12.5	
メキシコ	1973	15.8	35.5	13.8	72.6	24.1	3.7	20.5	6.9	40.4	0.7	
アメリカ	1974	1.6	170.5	17.7	343.4	98.1	9.0	15.8	6.4	49.5	12.2	
チリ	1971	21.4	101.7	10.5	105.1	61.7	6.0	35.5	9.6	32.0	5.2	
コロンビア	1970	12.5	42.4	6.6	75.9	27.8	9.8	3.0	6.5	34.6	2.7	
オーストリア	1974	8.1	258.3	15.7	350.3	189.2	23.1	32.6	7.2	74.7	23.6	
チェコスロバキア	1973	7.0	225.7	16.7	—	187.6	10.3	16.9	8.8	57.5	22.4	
デンマーク	1973	2.6	231.9	12.6	—	99.5	5.7	10.9	7.3	46.8	23.8	
ドイツ連邦共和国	1972	6.8	233.7	32.6	311.0	171.9	20.7	25.2	6.5	61.0	19.9	
ハンガリー	1974	15.6	239.6	4.1	304.5	166.1	61.3	16.2	10.9	58.1	40.7	
イタリア	1972	6.2	187.0	21.3	251.8	129.7	24.9	31.8	7.6	48.9	5.8	
オランダ	1972	1.5	197.5	11.7	254.7	97.9	9.2	4.2	7.6	45.9	8.2	
ノルウェー	1973	2.5	187.5	6.8	323.2	155.5	14.1	4.0	6.2	52.4	8.7	
ポーランド	1974	13.8	149.6	4.1	174.5	47.7	18.6	9.7	10.1	46.9	11.3	
ポルトガル	1973	12.4	137.1	10.6	154.7	248.7	5.0	31.7	8.5	55.6	8.6	
スウェーデン	1973	4.5	228.5	16.2	407.8	112.9	5.1	10.4	6.8	44.9	20.8	
スイス	1973	5.7	208.1	26.1	228.0	105.2	19.8	13.8	7.9	55.7	18.8	
イングランド・ウェールズ	1973	2.7	244.1	10.4	379.9	163.9	17.8	3.7	8.3	33.9	7.8	
オーストラリア	1973	0.9	147.7	13.6	291.5	121.3	11.1	7.1	9.1	51.9	11.6	
ニュージーランド	1973	3.0	159.6	15.8	268.5	118.6	14.4	4.8	11.5	59.0	8.8	
フィリピン	1974	75.1	30.0	2.7	54.6	11.6	18.3	4.1	4.7	10.8	1.1	
平均		10.5	167.8	13.3	234.8	116.7	15.1	14.9	7.8	47.6	13.3	

(6) むすび

わが国では「脳血管疾患」による死亡が多いが、これに反して、西欧では「心疾患」による死亡が多い。わが国における「脳血管疾患」による死亡率は、過去77年間に渡り、あまり変化がみられないが、最近の数年間は減少のきざしがみえている。本疾患の内訳をみると、脳出血死亡率は昭和35年以降、急激に減少傾向をみせており、一方、脳梗塞は昭和30年頃は非常に少なかったが、その後、急激に上昇し、昭和50年には脳梗塞が脳出血を抜いてしまった。しかし、最近の数年間に「脳血管疾患」が減少しているのは、脳出血死亡率の減少によるものである。わが国の「心疾患」による死亡率は上昇している。そこで、本疾患の内訳をみると、虚血性心疾患死亡率は昭和30年前後から急激に上昇、慢性リウマチ性心疾患は戦後の30年間に半減している。その他の心疾患死亡率は横ばい傾向を示して

いる。したがって、「心疾患」死亡率の上昇は虚血性心疾患死亡率の上昇によるものである。将来、わが国における「脳血管疾患」による死亡率は減少傾向を示し、一方、「心疾患」による死亡率は上昇傾向を示し、西欧諸国の死因順位と同傾向を示す方向へ進むように思われる。したがって、今のうちから「心疾患」の予防策を講ずる必要があるだろう。

本報告では、昭和52年度の10大死因を取扱ったために、「全結核」による死亡に関しては、ふれなかった。しかし、「全結核」は戦前から昭和25年まで死因順位第1位であったが、昭和47年以後、第10位に転落し、昭和52年には第10位以下に姿を消した。

長期間に渡り死因の変遷を見渡すと、医学の向上により治療が可能になった「全結核」や「肺炎・気管支炎」による死亡が減少し、そのかわりに「悪性新生物」や「先天異常」のような難病による死亡がクローズ・アップされてきたといえよう。また同時に、低位死因群に含まれるが、「肝硬変」や「糖尿病」による死亡も最近目だち始めていることを追加しておきたい。

今後、平均寿命を延ばすためには、「悪性新生物」であるガンの早期発見によりガンを予防すると共に、「脳血管疾患」、「心疾患」、「高血圧性疾患」、「肝硬変」および「糖尿病」などの疾病も、中年以降の食生活をも含めた健康管理をすることにより、これらの疾病の発病を減少させることが可能と思われる。

(今泉洋子・三田房美)

文 献

平山 雄、『予防ガン学』、新宿書房、1977年。

今泉洋子、「先天異常率の推移と地域変差に関する分析」、『人口問題研究』、第127号、1973年7月、20～34ページ。

今泉洋子・三田房美、「日本における糖尿病死亡率の年次推移と地域格差—死亡統計分析—」、『人口問題研究』、第147号、1978年7月、24～54ページ。

厚生省大臣官房統計情報部、「交通事故以外の不慮の事故死」、『人口動態社会経済面調査報告』、昭和52年度、1979年6月。

篠崎信男、「死因別死亡の特徴」、『人口問題研究』、第100号、1967年2月、96～108ページ。

3 地域・社会的差異からみた死亡

(1) はじめに

地域の自然的環境の差異、医療水準、あるいは食生活の違い等、社会経済的差異によって死亡状況に差が生じる。また、職業、配偶関係等、個人のおかれている立場によっても死亡状況に差が生じることは考えられる。

死亡状況を端的に表わす指標として、生命表の平均寿命がある。最近では、厚生省大臣官房統計情報部において、国勢調査年次の都道府県別生命表を作成しているので、死亡状況の地域差を生命表の平均寿命および年齢別死亡率によってみることにする。次いで、配偶関係による死亡状況の差について、死因構造の分析も含めてみることにする。なお、職業別、産業別死亡については、国勢調査年次について公表されていたが、昭和50年の結果がまだ公表されていないため、差別死亡率としては重要な指標であるが、ここでは除くことにする。